

気象学者のための英語* (1)

木 原 研 三**

上のような標題を掲げてはみたものの、この文を読めばその日からうまい英語が書けるようになるわけではない。羊頭狗肉のそしりを免れるために、このことはあらかじめお断りしておきたい。私事にわたるので恐縮であるが、太平洋戦争のころから終戦直後にかけて、気象技術官養成所に教鞭をとり、以後ときどき英語の気象論文の添削を求められた者として、諸論文に最も共通な文章上の欠陥や語法上の誤りあげ、また具体的な添削の例をお目にかけて今後のご参考に供することがこの拙文の意図するすべてである。英語の諸技能のうちでも完全な英文を書くことは至難のわざであって、筆者なども英米人が見て非の打ち所の無いような文章が書ける自信はもうとう持っていない。われわれとしては、こちらの意とする所が伝達され、文法的にもみっともない英文が書ければ一応よしとしなくてはなるまい。もっとも筆者がこれまでに拝見した論文の中には、文法・語法はもとより英語のリズムまでマスターされた達意の文章も見うけられたが、そのような文章を書かれるかたがたは拙文では考慮の外に置くこととする。

まず注意すべき根本的なことは、英文を作るということ、原和文の一語一語を英語のそれに置きかえることではないということである。これが軽度で済めば日本語くさい英語ぐらいにとどまるが、極端な場合には、英文としては意味をなさず、日本語に直訳してみても初めて意味がとおるというような英文ができる。英文を書くとは、自分の中に蓄積された英語表現のストックから、発表したい思想内容に相当するものを選び出し、英文構造の法則に従ってこれを配列することであるべきである。従って英文を書くための準備としては、多くの英文に接するのみならず、英文を書くときのことを考えて意識的にあとで使えるような表現を記憶しておくことが必要である。そういう語句をカードにとって整理しておけば理想的であるが、読書の際にちょっと表現に注意を向けるだけでもかなりの効果はあるものである。

* English for the Meteorologist

** K. Kihara: お茶の水女子大(英語学講座担当)
1968年3月31日受理

以下具体的に問題点を取り上げることとする。

(1) まず日本人のもっとも手がとる冠詞を考慮しよう。しかし冠詞はつねに名詞に伴って現われるのであるから、名詞の種類と密接な関係がある。その点で Countable noun (可算名詞、すなわち単数複数のあるもの) と Uncountable noun (不可算名詞、water, information, honesty などの類で、複数形を持たないもの) の区別が重要である。最近の英和辞典では、この Countable, Uncountable の別を個々の名詞について示しているものがある。ところで端的に言えば「**Countable noun の単数形にはかならず a がつく**」ということ、「**限定されたものを表わす名詞には the がつく**」ということ、この2点にしばられる。複雑な冠詞用法も帰するところはこの二つの原則に過ぎない。(以下の文例・語句例で*印のついているものは誤りを含んでいることを示す。)

具体的に言えば、まず Uncountable noun に定冠詞をつける誤りがある。たとえば

*In the cloud physics two processes are prominent. では the は不要である。特に限定された場合を除き、学問の名前は Uncountable である。

*A theory for the variation due to the friction was first developed by Ekman.

の variation も Uncountable であるが due to friction という限定句がついているので定冠詞が用いられているのである。friction はここでは一般的な意味で用いられているから冠詞は何もつかないのが正しい。しかし friction も at the earth's surface というような限定句がつけば定冠詞がついて the friction at the earth's surface となるだろう。Countable noun では定冠詞をつけて一般的な意味を表わす用法がある(たとえば This layer is called the friction layer. という場合の the は特定の friction layer であることを示すものではない)。その類推で、一般的な意味で用いられた Uncountable noun にも定冠詞をつける誤りがしばしば見受けられる。

上述したところから、一般に限定句を伴うときは定冠詞がつくということになりそうであるが、さらにこまか

く考えると、限定句の中にも、明確な強い限定力を持ったものと、単なる修飾句にすぎないものがある。後者の場合には必ずしも定冠詞は必要でない。たとえば *a belt of high pressure* と *the inventor of this instrument* とを比べると、同じく *of* を用いた前置詞句であるが前者は単に修飾しているだけで、これがつくことによってある特定の *belt* に決定されることはない。これに反し、後者では特定の個人に限定されてしまうので定冠詞が必要になってくる。しかし前者でも *the belt of high pressure over Alaska* では、*over Alaska* という限定句のために *the* が必要となる。

限定は限定句の存在を必ずしも必要とせず、時には文脈 (context) あるいは場面 (situation) の上から限定が働き、定冠詞が必要とされる。たとえば

As the warm season approaches *the* pressure lowers over South America.

の定冠詞は、ここで問題になっている *pressure* が *pressure* 一般ではなく、文脈からして場所的に限定された *pressure* だからである。(warm season の前の定冠詞は一般的意味の定冠詞であろう。) *pressure* 一般ならば、もちろん次のように無冠詞である。

Another instrument for the measurement of *pressure* is the aneroid barometer.

以上述べたことは原則であって、実際の文では、特に簡潔なスタイルの文では冠詞の省略が大目に見られることがある。たとえば英国の気象台発行の *Meteorological Glossary* の *khamzin* の項では

... while *pressure* is high to the east of the Nile

となっていて上に掲げた文と同じような文脈であるにも拘わらず無冠詞になっている。Glossary 中の解説という性質上、簡潔にしたのかと思われるが、それにも色々段階があって、附図の説明中などだったら *the east of the Nile* の *the* は省略することは、まず無さそうである。川の名の定冠詞が省略されることはほとんどない。われわれとしては、あまりこまかいことは考えず、迷うときは原則に従って書くということにすればよい。

不要な冠詞の例として、固有名詞の所有格の前に誤って置かれる定冠詞がある。Newton's law でよいのを **the* Newton's law とする誤りである。固有名詞を所有格にしないで形容詞的に用いるならば *the* が必要であって、「ブラウンの子供たち」は *Brown's children* とするか *the Brown children* とするかどちらかである。**the*

Brown's children と言うことはない。

同じく、*both* の前にも *the* をつけることはない。誤って **the both children* とする人がよくあるが、これは *both children* が正しい。 *the* を入れたければ *both the children* とする。ドイツ語では、*die beiden Kinder* のように言うが、これと混同してはならない。

冠詞の繰り返しに関して、文法書では *a scholar and poet* は「学者兼詩人」、*a scholar and a poet* は「学者と詩人」と説明しているが、この相違は多くは文脈で決まるもので、文法書で言うほど冠詞の有無は厳密に守られてはいない。しかし数とからんで、次のような場合の原則は守ったほうがよい。それは「19世紀と20世紀」の訳としては *the nineteenth and the twentieth century* とするか *the nineteenth and twentieth centuries* とするかである。つまり定冠詞を繰り返せば *century* を単数に、繰り返さなければ複数にするのである。どちらも意味に差はないが、前者のほうがそれぞれの世紀を個別的に強く表現している感じであるから、たとえば *between* を使うときなどは *between the tenth and the twentieth century* とするほうが正確である。

(2) 数 (Number) に関して、これも日本語文法に無い文法形式なので、しばしば誤りのもとになる。最も普通に見られるのは上述の *Uncountable noun* を *Countable* と思って複数にすることである。その例は *information, advice* などで、これから *informations, advices* という複数形を作る人が多いがこれは誤りである。いわゆる抽象名詞でも *kindness* や *beauty* などのように複数形になって、それぞれ「親切な行為 (のかずかず)」 「(いろいろな) 美点」のような複数的な概念を表わす語があるが、*information* や *advice* は決して複数にならないのみならず *an information, an advice* とすることも無い。(knowledge は複数になることは無いが *have a knowledge of Russian* のように言うことができる。) *weather* も普通は *a* をつけず、*in bad weather, a spell of fine weather* のように言うが、例外的に *in all weathers* という句では複数形になる。(主語として用いると *The weather was fine on that day.* のように *the* がつくが、これはその時その場所での天気で限定されているからである。)

今 *in all weathers* を挙げたが、これから形容詞を作ると *an all-weather plane* (全天候飛行機) のように言う、こういう複合語の第二要素は複数にしないのが原則である。たとえば *the first five-hour period/the Bruckner*

35-year cycle

every, each と複数名詞を結合させるのもよくある。
*in every directions のようにするのは誤りで, in every direction か in all directions にしなくてはならぬ, every や each は個別化して一つずつを取りあげるの
で, 後の名詞は必ず単数, all は全体を集合的に見るの
である。

複数の作り方問題なのはラテン語ギリシア語から入
った術語で, もとの言語の変化形を残しているものであ
る。しかし, その多くは英語化するにつれ英語式に -s 複
数も作るようになった。focus, formula などもとの
faci, formulae のほか英語式に focuses, formulas でもよ
い。ただ -is で終る axis, analysis の類は頑強に axes,
analyses のような変化形を保持している。

.....

一つの試みとして和文英訳課題を出して読者の解答を
募集し, 誌上で検討してみようと思う。ふるって応募さ
れたい。締切は5月25日, 宛先は投稿の場合と同じ, 3
題中任意のものを選択しても可。

和文英訳課題

(1) 台風の子報でとくに重要なのはその進路であ
る。したがって台風の数や進路についてはいままでにも
多くの研究が行なわれた。まず台風の代表的な進路を
調べてみると南洋にある間は西から西北西に進み, 沖縄
の南東方で次第に進路を北西, 北, 北東というように変
え, それからは北東ないし, 東北東に進み, いわゆる放
物線状の経路をとる。(高橋浩一郎)

(2) 中緯度対流圏での5日平均の大きな循環の変動
は圏界面付近にも大きな影響を与えているので, 逆に圏
界面付近の変動の移動を見ておれば, 異常気象をを起こ
す程度の気象現象は20~30日前から予測できる。(今田
克) [本誌1967.12月号より]

(3) 水滴が直径約7,000 ミクロンほどになると落下
速度は秒速30フィートよりやや大になる。このような高
速度では水滴は平たくなり, やがて幾つかの小水滴に分
裂する。つまり, 大気中に存在し得る水滴の大きさには
ある限度があるのである。

〔通信欄〕

鯉沼氏の“日本の気象観測の始まり”について

根 本 順 吉*

本誌1月号所載の上記論攷について編集部からコメン
トを求められましたので, いくつかの疑問点をあげ
識者の教示を得たいと思います。なお歴史は史実がもっ
とも大切であるので, 非礼をかえりみず誤植ないしは思
いちがいと思われる点をあわせていくつか指摘すること
にします。

1. p.29 左 14~15行. 藤原咲平の“日本気象学史”
(1951) (1) の引用として村上山城守匡房の“舟要術”
という著書をあげていますが, これは村上山城守雅房の
“船行要術”ではないでしょうか。これはどうい誤植
とは考えられません。何を根拠にこのように書かれたの
でしょうか。

2. p.29 左 23~24行. 気圧計や温度計が日本に渡来
したのは享保元年(1716)吉宗が八代将軍になってから
であると受け取れるような書き方がしてありますが, 温
度計の場合はさらにさかのぼれるのではないでしょ

か。すなわち三上義夫(1936) (2) の考証によると温度
計渡来の記録として, もっとも古いものは寛文四年
(1664) のものであり, 西川如見の“増補華夷通商考”
(宝永五, 1708) にも明らかに温度計と同等されるもの
の記述があり (3) これらを見無視するわけにはいかない
でしょう。

3. 気圧計は天気儀。温度計は気候儀と昔は一般によ
ばれたように書かれていますが (p.30 左下から3~4行)
はたしてそうでしょうか。たしかに間の文書 (4) にはそ
のように書かれてはいますが (4), これのはじめからの
一般的な名称であったかどうかは疑問です。温度計およ
び気圧計の名称については, かつて大島文義が多くの蒐
集をしましたが (5), この中には天気儀, 気候儀という
名称は見あたりません。蘭学事始 (6) でも天気儀であ
って, 天気儀ではありません。天文台では上記の名称
を使っていたようにも思えますが“靈憲候簿” (1838~
1855) の記載は晴雨儀, 寒暖儀となっています。だから天
気儀, 気候儀は間だけの用法のように思われるのですが,

* 気象庁予報部
—1968年3月21日受理—